

共に生きて

紙面についてのご意見、感想をお寄せください。メール、ファクスで受け付けます。郵送の場合は〒810-8721(住所不要)、西日本新聞生活特報部へ。

生活特報部 FAX 092 (711) 9056 メール seikatsu@nishinippon-np.

小さな命の キセキ



登山 万佐子

2006年11月、妊娠6カ月で長女綾美(8)を出産した私(44)。産後、ひどい貧血と血圧上昇で体を動かすこともままならず、情報も遮断されていました。その間、娘は頭蓋内出血と肺出血を同時に起こし、かなり危険な状態に陥るなど、次々と試練に襲われていたのです。

長男(13)は妊娠40週と5日、体重約3千㌦の一般的な出産でした。娘は予定日より4カ月も早い23週と1日で体重は452㌦。今までの知識と経験が及ばない現実、突然たった一人で真っ暗闇に放り込まれたような感覚でした。

知りたいたことはただ一つ。娘の命は続くのかということ。同じように小さく生まれ、

成育限界 厳しい現実

生きている子がいる事実を見つけたかったです。

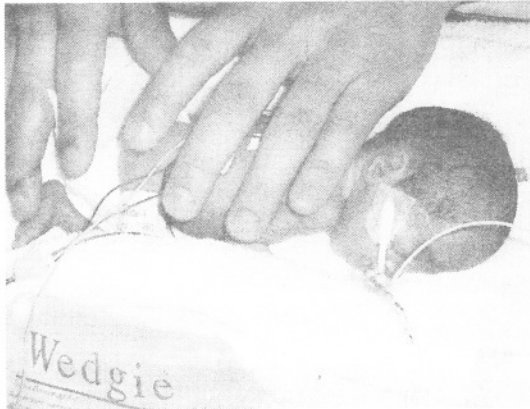
出産から10日目、私は退院しました。自宅に帰る途中、

妊娠22週で出産した人の手記と、大手出版社発行の「未熟児」に関する育児本を買いました。手記はその日のうちに読み終えました。初めてポロポロと涙が流れ、止まりませ

ん。生きている子がいる！それだけで十分でした。

育児本には低出生体重児の

保育器の中で眠る生後40日の綾美ちゃん



年齢ごとの成長や発達、知っておきたい病気など基本的なことが書かれていました。以前は「未熟児」と呼ばれていたけれど、今は「低出生体重児」と呼ぶ。特に、千㌦未満で生まれた赤ちゃんを「超低出生体重児」と呼ぶことを知りました。

しかし、娘ほど小さな赤ちゃんの例はほとんどなく、「23週で生まれた赤ちゃんにまれに起こることです」の文章が頭から離れません。わが子は「まれに起こる」という週数で生まれたのだから。夜も眠れず、インターネットで情報を探す日々。確かな情報を得たくて、超低出生体重児に関する医学専門書を読み、厳しい事実を知ることになりました。

「24週未満、500㌦未満の子の生存は例外的である」「生物学的、医学的観点から成育限界は400㌦、500㌦、22ㄴ23週の間」「23週生存率43%、400ㄴ499㌦死亡率50%」…。「未熟児」とい

うと、小ささはかりが注目されがちですが、お母さんのおなかに何週いたかという在胎週数もとても重要です。体の器官、機能ができる途中の胎児にとって、おなかの中で過ごす1日の違いはとても大きいのです。娘のまぶたは筋があるだけで、まだ開いていませんでした。片方の目がかすかに開いたのは生後16日目。

在胎週数も体重もどちらもが限界値。現実がいかに厳しいかを初めて突きつけられたのです。でも、何度も何度も本を読み返して気が付きました。決して「生存率0%」とは書かれていない！

そうだ、大丈夫！ 絶対に大丈夫！

(「Nっ子クラブ カンガルーの親子」代表、福岡県筑紫野市)

毎週木曜掲載